

子どもキャンプでのふれあい



藤崎真知代

人間は誰しも他者とかかわりあって生活し、その過程において相互に影響を及ぼしあいながら発達していく。おとなと子どもとの関係においても同様であり、ともに自己の成長を目指して歩んでいく存在同志であり、個人個人が全人間的に示すあり方が問われるといえよう。

このような観点に立って、われわれおとなが子どもにとってもつ意味と、人間関係のあり方を体験を通して明らかにしていくために、おとなと子どもとの共同の生活の場 Human Relationship Laboratory (通称H・R・L、ないしは子どもキャンプと呼ばれる)を、毎年夏休みにもつということ

が、古沢頼雄氏を中心に行なわれてきている。

そこでは、準備過程として、毎年子どもキャンプ前に、おとな達が二回の合宿や月一回の例会において相互にかかわりあいながら、自己のあり方を考えあう機会をもち、そこから、子どもにかかわる基本的態度についてある程度の共通の理解(意識)を為しうるように努力している。それは、「子どもがおとなを必要としている時に、そのことを敏感に感じとり、十分に受けとめ、その子どもの必要に応じて対応する」ということであると、私自身は理解している。そして、具体的な子どもとのふれあいの中で、どういう場面で、どう

対応するかは、それぞれのおとなに任されているだけに、
「その時、どうしてそのように行動したのか」について、繰
り返し自分自身に問いなおすことを通して、「自分を見つめ
る」ことが余儀なくされるといえる。

このような準備過程と平行して、二・三度子ども達とふれあ
う機会（子どもグループと呼んでいる）をもった後に、夏休
みの四―五泊以上の子どもキャンプを迎えるのである。

参加する子どもは、昭和四十年九月から四十一年二月にお
たつて、東京・母子愛育会愛育病院で第一子として生まれ、
追跡研究の協力家族となっている人達の中から、この企画に
応募したもので、年によって構成員には多少の変動があるに
しても、ほぼ二十五名前後である。一方、かかわるおとな
は、日常的な例会、および子どもグループのかかわり手とし
て参加しているおとなの他に、子どもキャンプを中心に参加
するおとな、および医師を含めて二十名前後で、総勢四十―
五十名となる。

子どもが六歳の時から始めたこのキャンプは、キャンプ地
を軽井沢、岩井と経て、翌年（昭和四十七年）に群馬県の中
里村、長寿園という一つの村、一つの施設に出会って以来、
昨年までの七年間、そこで行なわれてきている。私自身は、

第二回中里キャンプ、すなわち子どもが九歳のときから、ひ
とりのかかわるおとなとして参加しつづけているのである。

ところで、このキャンプを通して子どもが体験する基本的
なことは、一日を過すにあたって、子どもの気持とは無関係に
決められた予定に自分自身をあてはめるのではなく、個々の
子どもが、その時々自分の気持にそって、自分で一日を作
り出していくことである。たとえば、起床時間、食事時間、

就寝時間について、だいたいのところは決まっているけれど
も、早く起きて、朝食前にひとしきり自分のやりたいことを
する子どももいれば、遅くまで寝ていて朝食を食べそこねて
しまう子どももあり、また何人かで徹夜をしようと、夜遅く
までがんばっている子どももいる。いずれにしても、子ども
自身が自分の行動を決め、その結果体験する様々なことを、
自分の責任の中で受けとめながら、自然と出会い、子どもと
出会い、おとなと出会っていくことであるともいえよう。

そうした基本的なあり方を大事にしながら、子どもがやり
たいということ（たとえば川遊び、ハイキング、化石取り
等）については、子どもの意向がなるべく実現されるように
おとなが援助する。一方、おとなの側から、「こんなことも
できるよ」といったことを子どもに知らせ、子どもとおとな

が一緒になって企画を進めていくものもある。

このような毎日の企画に対して、参加する、しないは、もちろん子どもの意志に任されており、キャンプ期間中、宿舎から外には一歩もでない子どももいたりする。そして、そうした一日一日の子どもの行動や、気持の動きなどについて、夜、おとなの間で話し合い、それぞれの子どもにとって、このキャンプ生活での、その日のもつ意味について、時間と体力の許す限り吟味し、翌日の子どもとのふれあいに、そのことを、おとなそれぞれの受けとめ方で含んでいくのである。

たとえば、キャンプ前の子どもグループの時から、すでに“この夏は釣をやるう”と決め、色々な釣道具を持ってきて、毎日川での釣を楽しみ、釣大会を企画して、着々と自分のやりたいことを実現している男の子もいる。そんな彼にとって、おとなは、かたわらにただで十分であろう。また、その年のキャンプが終るとすぐに翌年のキャンプで演じる劇を考え始め、シナリオをほぼ一年近くあためてきた女の子もいる。彼女は宿舎に到着するとすぐに、その準備にとりかかり、子どもとおとなを含めて配役を誰にするか、練習時間をいつにするか……などあれこれと思い悩む。そして、劇を演ずるまでにまだ日数がある時は、他の企画に参加して

練習に出られない子どもやおとながいても、彼女なりに受けとめることができるのだが、いよいよ明日、今晚と迫ってくると、彼女の劇を成功させたいという気持の高まりと、なんとなく劇に参加している子どもの気持と、彼女に頼まれて断わりきれずに一つの役をどうにか演じようとしているひとりのおとなの気持との間には微妙なずれが生じることになる。すると彼女は苛立ち、塞ぎこんでしまうのだが、その時に彼女の気持をくみとり、“劇に参加している子どもやおとなにも、彼女が劇をやりたいと思うのと同じように、やりたいことが他にある”ということが受け入れられるように、しかも、そうした過程をすべてひっくりかえして、“劇をやった”という体験につながるようになることが、かたわらにいうおとなの配慮といえる。

子どもの年齢が小さい時には、おとなの配慮は身の囲りの生活の世話や、家族と離れていることの不安に対して主に向けられていた。が、子どもが成長するにつれて、そういう意味での配慮はほとんどする必要がなくなっている一方、それぞれの子どもが背負っている状況を十分にくみとった上で、少くとも、“このキャンプに参加してよかった”という気持を抱いて帰ることができるように配慮することが、

一層大切になってきていると思われる。

第一回目のキャンプが企画された時に子どもを参加させたお母さん方の当時の感想の中に、「いわゆるキャンプというイメージから、規則正しい生活を身につけて帰ってくるものと期待していたのが、どうもそのようなキャンプではないらしく、とまどっている」といったものがある。これを読んだで、第一回目も、それから十年経った今も、キャンプ生活の基本的あり方には変りがないのだな」という感想を持つと同時に、こうした基本的なところを、今後も大事にしてゆきたいと思うのである。

キャンプを終えて引き上げる時には、色々と片づけるべき仕事が増える。子どもは、小さい時には、その間、外で遊んでいたのだが、二三年前から、自然と参加するようになってきた。自分のやりたい仕事を選び、おとなと一緒に作業をすることを通して、一つのふれあいの場となりつつあると同時に、キャンプ生活を営む上で必要な仕事の一つに子どもが参加し始めたといえる。こうした変化を捉えながらも、さらに子ども自身の中に、積極的にキャンプでの仕事に参加したいという意向が育まれるまで待つことが、いわゆる人間生活を支えている仕事を内的に受け入れていく過程で意味をも

つてくると思われる。

この夏のキャンプは、キャンプ地を七年ぶりに、中里から西湖に移して、どのようなものになるのであろうか。思春期を迎えた子ども達と向いあうことのむずかしさ、大事さ、そして楽しさを感じながら、ますます自分自身のあり方が問われる子どもキャンプであると痛感するこのころである。

